

なので、私は解決策について話したいと思います。あらゆる国において、青年期の日々を華々しいものにしたいなら、若い世代を力強く、創造的で、明るい未来を持つものにしたいなら、彼らを若いままにしておく必要があります。

「若いまま」というのは、自分や世界をより調査し、新しいことを創造し、多くの疑問を生み多くの失敗をする、そういったことをする自由を持つことです。失敗は、そうすればより良くなるか、より良い決定ができるかを教えてくれます。

吉田寮は多くの新しいことに取り組み、また多くの失敗を積み重ねることで発展してきました。昔の吉田寮は女性も外国人留学生も受け入れませんでした。今では、様々なジェンダー・アイデンティティ、年齢、背景、そして国籍を持った人々が同じ空間を共有しています。寮をあらゆる人に対して良い場所にしていくために、寮生たちによって決断がなされ、多くの闘いがありました。吉田寮は常に変化発展して、現代社会の変化に順応しています。もちろん吉田寮には多くの改善すべき部分があり、それが京都大学を我々の敵ではなく、味方として、寮の物理条件の改善を助けてくれてより暮らしやすい場所にしてくれる味方として必要とする理由なのです。

自らに問いかけない文化、変化あるいは適応しない文化は必ず消滅するでしょう。世界が変わっていくなかで、教育や大学と学生との関係も変わる必要があります。学生生活を向上させる解決策を見つけたいなら、より良い対話と賦課を減らすことが必要です。吉田寮のような場所があるということ、常に現状に疑問を投げかけ、新しい方法について議論し、青春時代の力の象徴であるようなコミュニティがあるということは、ただ良いことであるだけでなく、必要なことでもあるのです。もし京都大学が吉田寮を潰したら、それは京都大学の学生の青春時代の大きな部分を殺すことになるでしょう。吉田寮を潰すということは、そこに長年暮らしている人を追い出すだけでなく、創造性、批判的思考、そして青春を立ち退かせることも意味するのです。

青春も、創造性も、そして自己批判能力もない大学は、退屈で、退化し、現代的な必要性や要望に答えられないであろうことが運命づけられた大学です。従って、もし大学側が我々と共に取り組めば、京都大学において、吉田寮とは悩みの種ではなく、学生の青春時代が花開くことを助ける解決策であると理解できる、私はそう願っています。